山陽新聞2月21日（金）掲載記事

第14回おかやま新聞コンクール　新聞感想文の部　最優秀賞

高校　岡山県知事賞

彼女が見せた姿

倉敷市・川崎医科大付属高１年　岩本　えみりさん

「抑圧に負けず私は踊る」。そう言った彼女の名前はマニージャ・タラシュさんだ。「タリバン（暫定政権）にとって、ダンスは『罪』。でも、踊っている時は、難しい問題から解放される」。そう語る彼女は、命と隣り合わせの生活による恐怖やストレスで十分にダンスをすることができなかった。その後、彼女は難民として移住して自由になるも、祖国で抑圧される友人たちが気がかりだったと言う。日本では誰もが自分のしたいことを実現することができる。しかし、そんなチャンスすらない人たちがいることに、私は驚いた。

そんな中で決まったオリンピック出場。彼女の祖国では女性のスポーツを禁止する。「だからこそ見せたい姿がある」。２０２４オリンピック。テレビを見ていた私は、そこで祖国の自由を訴える彼女の姿を見て驚き、困惑したことを今でも覚えている。彼女は難民選手団の一員としてダンスの演技中に祖国への訴え「アフガニスタンの女性に自由を」と記したマントを着用し、失格となった。英姿、雄姿、麗姿。「姿」には多く表現されるものがある。しかし、その「姿」を見せることは、実は誰にでもできる簡単なことではないと知った。

オリンピックで政治的表現を行うことは、選手生命を絶つ事と同じである。命がけ、とでも言おうか。なぜ彼女はそのようなことをしたのか。記事にある「だからこそ見せたい姿がある」。ここに答えがあると私は思う。彼女の見せたい姿、それは踊っている姿ではない。栄光を勝ちとる姿でもない。自分の主張を曲げない、信念を貫き通す姿だ。彼女が見せたその姿が、今でも私の記憶に深く刻まれている。

彼女は言う、「私の夢は、踊ること、歌うこと、やりたいことを自分で選ぶこと」。彼女は知っている。自分のやりたいことと幸せは、完全なイコールでは結ばれないということを。自分のやりたいことを貫くことで、いばらの道を進むことになるということを。

私は将来医師になるという夢を持っている。しかし、大人に近づくほど、自分の夢や可能性について現実的に考えるようになっていった。そんな時に彼女の姿を見て、自分の今の姿を強く意識するようになった。今、私にできること。それは、学校行事に全力で取り組む姿、前向きに勉強する姿を見せること。それを通して実現していきたい。いつか、思い描く理想の医師になった姿を。

岩本えみりさんが題材にしたのは、パリ五輪ブレイキン女子に出場した難民選手団所属アフガニスタン出身選手を取り上げた朝日新聞の記事（２０２４年７月21日付）です。取材対象の了解が得られず、掲載できませんでした。ご了承ください。

寸評

記事を読んで「自分のやりたいことを貫くことで、いばらの道を進むことになる」という厳しい現実を感じたことが、目の前の事に全力で取り組む決意につながったと分かります。

山陽新聞2月24日（月）掲載記事

小中高46人・団体表彰

おかやま新聞コンクール 20校に学校賞

小中高校生を対象にした第14回「おかやま新聞コンクール」（岡山県、県教委、岡山市、市教委、山陽新聞社主催）の表彰式が23日、山陽新聞社さん太ホール（岡山市北区柳町）で開かれた。新聞感想文と新聞づくりの両部で計46人・団体に最優秀賞と優秀賞、しごと賞、郷土賞、さん太ハート賞、学校を挙げて取り組んだ20校に学校賞が贈られた。

受賞者らを前に、山陽新聞社の松田正己社長、上坊勝則副知事、中原健一岡山市副市長が「大量の情報があふれる現在、事実を正確に捉えて深く考え、表現する力を身に付けるために新聞を活用してください」などとあいさつし、最優秀賞（8人・団体）に賞状を手渡した。

山陽新聞社の松田社長から賞状を受け取る受賞者

優秀賞（32人・団体）、しごと賞（2人・団体）、郷土賞（2人）、さん太ハート賞（2人）、学校賞は、松田社長、中村正芳県教育長、三宅泰司岡山市教育長、光藤伸史・県市長会事務局長、池永亘・県町村会事務局長、三宅秀司・協同組合山陽新聞山陽会代表理事が贈呈した。

さんデジに動画

受賞者・団体を代表し、新聞感想文の部で高校最優秀賞（県知事賞）に輝いた川崎医科大付属高1年岩本えみりさん(16)は「感想文を書く中で、筆者の思いをくみ取り、自分の考えを分かりやすく伝える方法を学べた」と述べた。

コンクールの応募総数は1万6492点（新聞づくりの部1万3189点、新聞感想文の部3303点）。入賞46点、入選682点が選ばれた。

（中川結）